

現代日本語における親族呼称の時代変化と加齢変化

尾崎 喜光[※]

A Study on Era-change and Aging-change of Relative Names in Modern Japanese

Yoshimitsu OZAKI

1. はじめに

テレビアニメの『サザエさん』を観ていると、サザエは父親のことを「トーサン」、母親のことを「カーサン」と呼んでおり、どことなく“昭和のかおり”を感じさせる。現在は「オ」を付加した「オトーサン」や「オカーサン」が主流であることを考えると、「トーサン」から「オトーサン」へ、「カーサン」から「オカーサン」への言語変化が過去にあったのではないかと推測される。

父親・母親に対する呼称には「オヤジ」「オフクロ」もあるが、これらには日本社会における言葉の変化というよりも、個人内での変化が感じられる。現在両親に向かって「オヤジ」「オフクロ」と呼びかけている人も、幼児や児童の頃はそうした呼称を使っていなかったに違いない。ということは、その間のどこかで使い始めるようになったということである。

父親・母親に対する呼称には「オトン」「オカン」もある。これには地域差が感じられ、近畿地方を中心とする西日本に多いようであるが、若年層の間では、最近はある程度全国的に使われているようにも感じられる。使用地域を拡大しつつ普及している可能性が考えられる。このうち「オカン」については、母親から届いた誤変換のメールをネタにした『おかんメール』という書名の本が扶桑社からシリーズとして刊行されてもいる。「オカン」が“全国区”化していることの一つの現われであろう。

全国的に急速に普及しつつある親族呼称と言えば、祖父母に対する「ジージ」「バーバ」がある。筆者が初めてこの呼称に接したのは、2004年夏にNHK総合テレビで放送された西田敏行主演(祖父役)の『ジイジ～孫といた夏』というドラマであった。ドラマの題名に使われるくらいであるから、すでに当時はある程度普及していたと推測される。

もうひとつ、女子高校生を中心とする若い女性の間で使われている「ウチ」や「ウチラ」も、使用頻度が最近増加してきたように感じられる。1989年～1990年にかけて中学生・高校生の敬語使用と敬語意識をアンケート調査した国立国語研究所(2002)によると、「ウチ」を使うのは友達同士で女子がというのが中心である。大阪の女子高校生の使用者率が相対的に高く約2割であるのに対し、東京の女子中学生は約1割にとどまる。ところが最

キーワード：母親の呼称、オフクロ、オトン・オカン、ジージ・バーバ、ウチ・ウチラ

Key Words : mother's name, ofukuro, oton/okan, jiji/baaba, uchi/uchira

※ 本学文学部日本語日本文学科

近では、首都圏でも使用頻度が以前より増してきているように感じられる。関西を中心に使われていた「ウチ」が、おそらく現在“全国区”化しつつあるものと考えられる。

そこで本稿では、親族呼称を中心とするこれらの呼称の使用が現在どうであるのか、過去から現在に向けてどのように変化してきているのか、また個人の中で変化（呼称の置き換え）があるのかについて、主として筆者が行なった調査をもとに議論する。

2. 本稿で分析対象とするデータ

本論で議論の根拠とするデータは次の調査により得たものである。いずれも筆者がたずさわった調査である。このうち(2)と(3)は、実査は調査会社に委託して行なった。

(1) 札幌市での多人数調査（1985年実施、12歳～69歳の男女258人が回答）

(2) 全国での多人数調査（2009年実施、20歳～79歳の男女803人が回答）

(3) 岡山市での多人数調査（2013年実施、20歳～79歳の男女81人が回答）

それぞれ少し説明を加える。

(1) は単語アクセントの共通語化をとらえることを主たる目的とする調査であったが、本稿で分析対象とする項目は、回答者に事前に送付し面接調査時に回収した、単語アクセント以外のさまざまな表現についてその使用を問うた自記式アンケートによるものである。回答予定者は、住民基本台帳を閲覧し、登録時までずっと札幌市で生育したという条件にあてはまる市民を無作為に抽出した。当時は住民基本台帳に「前住地」も記載されており、それと現住地が同じであることを抽出の条件とした。札幌市生育者に限定したのは、札幌市のコアの市民のアクセントの変化をとらえることをこの調査の中心的な目的としたためである。アクセントは個人内での変化（置き換え）が小さいと考えられることから、札幌市での変化を年齢層の傾向の違いからとらえることとした。そのため、通常は無作為抽出では回答者が少なくなる高年齢も一定の回答者数を確保すべく、各年齢層はおおよそ同数になるよう調整した。従って、回答者全体の数値は、札幌市生育者全体を正確に反映しているわけではない。むしろ、年齢層による違いから言語変化を読み取る精度を高めることを優先した。なお、中学生と高校生は学校を通じて回答者を得た。それらを除く面接調査の達成率は40.2%であった。面接調査はできたがアンケートが回収できなかった者が4人、逆にアンケートのみ回収できた者が13人おり、結局アンケートは258人から回収した。性別内訳は、男性130人、女性128人である。また、年齢層別内訳は、10代50人、20代40人、30代43人、40代39人、50代45人、60代41人である。

(2) は国立国語研究所の調査研究の一環として実施したものである。^{注1} 調査の企画・実施は、当時所員であった筆者が主担当者として行った。回答者は無作為に抽出した。

(3) は筆者が学内研究助成金を受けて実施したものである。^{注2} これも回答者は無作為に抽出した。フェイスシート項目を分析したところ、出身地についても15歳までの最長居住地についても、岡山県を地理的背景とする回答者を7～8割含むデータであった。調査サンプルの代表性はおおむね確保されていること等については、本調査の最初の分析論文である尾崎喜光（2014）で詳細に検討している。

以下、調査結果を見ていく。

3. 調査結果

3.1. 母親に対する呼称（呼びかけ）

本節では、1985年実施の札幌市での調査と、2013年実施の岡山市での調査で得られたデータから、母親に対する呼称（言及形式ではなく呼びかけ形式）の使用状況とおもな変化傾向を見ていく。

(1) 札幌市での調査

アンケート調査の質問文と選択肢は次のとおりである。

質問8 小学生くらいの時、自分の母親には何とよびかけていましたか。

1. オカーサマ 2. オカーサン 3. カーサン 4. オカーチャン
 5. カーチャン 6. オッカサン 7. オッカチャン 8. オフクロ
 9. ママ 10. その他（ ）

質問9 では今は何とよびかけていますか。（オーバーチャンなどは除きます）
 （選択肢は質問8と同じ）

調査票の冒頭では「2つ以上○してもけっこうです。」と指示し、全ての設問で複数回答を可としている。本設問も同様である。「今」の使用に加え「小学生くらいの時」の使用についても回答を求めたのは、この間の変化の有無や変化の方向性をとらえるとともに、回答者の年齢を固定した前者の設問により、子供時代の母親への呼称（呼びかけ）の時代変化をとらえようとしたためである。井上史雄（2015）は、回答者に過去の言語使用を想起させるこうした調査技法を「記憶想起技法」と名づけ、現在との比較で言語変化を明らかにする調査理論として「記憶時間（memory time）」という概念を提唱している。

分析結果は尾崎喜光（1989）として報告しているが、そこに示したグラフのうち回答が少数であるものを「その他」とし、回答者の性別・年齢層別に改めて分析結果を示すと図1～図4のとおりである。回答者の年齢層は生まれ年にも対応する。たとえば60代は大正5年から大正14年の生まれである。そこでその情報も年齢層の直後に示した。

図1・図2により調査時点（1985年）の【今】の呼びかけを見ると、男性も女性も年齢層による違いが顕著に見られる。特に30代以上（昭和30年以前の生まれ）と20代以下（昭和31年以降の生まれ）との間での違いが大きい。

男性は、30代以上では「カーサン」と「オフクロ」が主要な表現であるのに対し、20代以下では「オカーサン」が主要な表現となっている。年齢層別に見た数値の変動から考えると、若年層になるに従い「カーサン」と「オフクロ」は縮小し、逆に「オカーサン」が増加する。

女性も、30代以上では「オカーサン」よりも「カーサン」が優勢であるのに対し、20代以下では「オカーサン」が主要な表現となる。なお「オフクロ」は女性で全く使われておらず、男性専用の表現となっている。男性での使用が少なかった「ママ」が、20代以下の女性で一定の割合見られる点も、男女の違いおよび女性の中での年齢差として注目される。

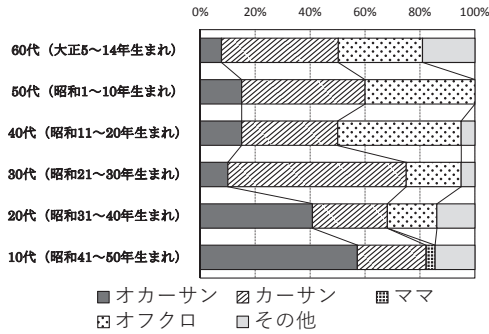


図1 母親への呼びかけ【今】(男性)

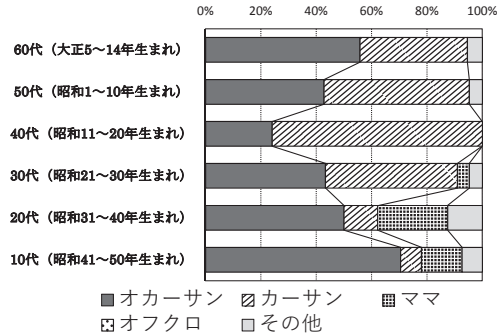


図2 母親への呼びかけ【今】(女性)

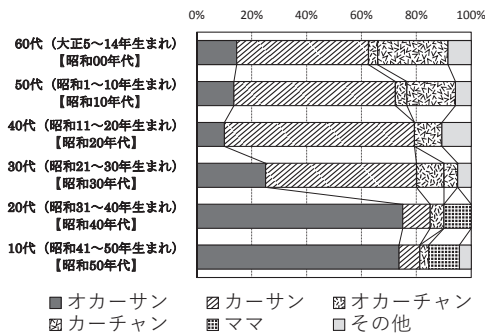


図3 母親への呼びかけ【小学生の頃】(男性)

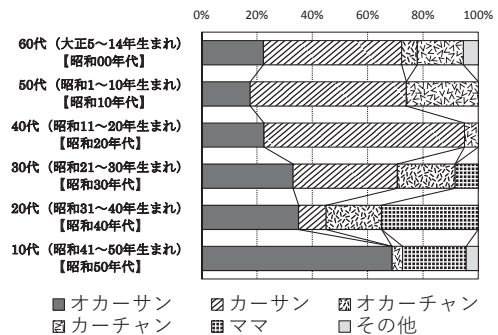


図4 母親への呼びかけ【小学生の頃】(女性)

以上をまとめると、母親に対する【今】の呼びかけの大きな傾向は、30代以上の「カーサン」と20代以下の「オカーサン」の違いと言える。男性では30代以上でさらに「オフクロ」が加わる。

一方、図3・図4は【小学生の頃】の表現である。平均すると回答者がおよそ10歳の頃の表現であると考え、たとえば大正5年から大正14年の生まれの60代の回答は、昭和00年代の子供たちの表現と見ることができる。同様に、最も若い10代の回答は昭和50年代の子供たちの表現と見ることができる。グラフにはこうした情報も付加した。これにより時代による変化を見てみよう。

ここでも男女とも、30代以上と20代以下とで大きく分かれる。時代で言うと昭和30年代以前と昭和40年代以降の違いということになる。以下では「時代」によりおもな傾向を見ていく。なお、このデータは【小学生の頃】のものであるので、分かりやすいよう、「男性」は「男児」、「女性」は「女児」と呼ぶこととする。

男児は、昭和30年代までは「カーサン」が非常に優勢であったが、昭和40年代以降で急速に衰退し、代わって「オカーサン」が急速に勢いを増して大勢を占めるようになる。昭和40年代の子どもたちの多くが「オカーサン」を使っていたという状況は東京でも同様である。東京都大田区の中学生約160人を対象に家庭内での呼称をアンケート調査した箕田兵衛(1974)は、母親への呼称で最も多かったのは「オカーサン」であったとする。

割合としては小さいが「ママ」も昭和40年代以降に現れるようになる。これは東京都

も同様である(箕田兵衛 1974)。「カーサン」に似た衰退傾向は「カーチャン」にも見られる。大きな変化傾向は「カーサン」→「オカーサン」であり、その転換点は昭和 30 年代から昭和 40 年代にかけてである。また、「カーチャン」の推移を見ると、「カーサン」以前は「カーチャン」が優勢であった可能性がある。そうすると男児には、「カーチャン」→「カーサン」→「オカーサン」という時代変化があったことになる。

女兒もこれと似た傾向を示すが、「オカーサン」が優勢になるのは、男児よりも約 10 年遅い昭和 50 年代である。これは、昭和 40 年代に、男児には少なかった「ママ」が伸長してきたことが要因として大きい。しかしながら、その後の昭和 50 年代にかけて「ママ」は大きな勢力とならず、また昭和 30 年代・40 年代に一定の勢力を持っていた「オカーチャン」も衰退したことから、昭和 50 年代には「オカーサン」が優勢となり、男児とほぼ同じ状況となった。大きな変化傾向は男児と同じと見てよい。なお、相対的に女兒に多い「ママ」は、【小学生の頃】から【今】にかけて数値がやや減少する。つまり、「ママ」を使うのをやめるという形での加齢変化が一部の女性に認められる。神奈川県内居住の高校 2 年生の女子生徒 135 人を対象に、両親に対する呼称について幼児時・小学生時・中学生時・現在に分けて 1979 年にアンケート調査した大久保晴雄(1982)は、幼児時から小学時になると「パパ」「ママ」が減少すると報告する。「ママ」を使うのをやめるという個人内での変化は、一部の女性では小学生の頃からすでに始まり、さらにその後も続くことが確認される。

札幌市では、「オカーサン」に取って代わられた「カーサン」が急速に衰退しつつあることは確かである。しかしその一方で、子供から大人への成長過程において、「オカーサン」と比べると子供っぽさを一層伴わない「カーサン」が、「成人語」として使われ始めるという一見矛盾した面も持っているように思われる。特に男性にはそうした置き換えがありそうである。図 3 の【小学生の頃】では 10 代・20 代の男性の「カーサン」の数値は低いが、図 1 の【今】になると約 3 倍に増加する。つまり、児童の頃から 10 代ないしは 20 代になる過程で「カーサン」を使い始めた男性が一定の割合いたということになる。この点について、東京都在住の小学生から社会人までの男女 250 人を 2010 年に調査したセペフリバディ・アサム(2012)は、高校生男子に対する関連する聞き取り調査において、「『お』を付けるのは子どもっぽいので、『お父さん』『お母さん』から『父さん』『母さん』に変えた」という回答が多く確認されたと報告する。札幌市でも、一定の割合の男性には同じことが生じていたものと考えられる。

以上と異なる観点で注目されるのは「オフクロ」の使用である。女性は【今】も【小学生の頃】も使用は全く見られない。これに対し男性は、【小学生の頃】は女性と同様に使用は全く見られないが、【今】は 20 代以上で 2 割～4 割程度の使用が見られる。つまり「オフクロ」は、男性が子供から成人になる過程で使い始める「成人語」と言える。

これに関連し、京阪神を中心とする関西在住の中高年 73 人(男性 18 人、女性 55 人)を対象に 2008 年にアンケート調査した尾崎喜光編(2009)の資料によると、中学・高校時代に「オフクロ」を使わなかったが今では使う人は男性に約 2 割見られる(中学・高校時代からすでに使っている男性は約 3 割)。「オフクロ」は、男性が成人期に向かいつつある中で使い始める「成人語」である傾向は、全国的に認められそうである。

(2) 岡山市での調査

札幌市の調査とほぼ同様の質問枠組みにより、2013年に岡山市で実施した調査から、母親への呼称（呼びかけ）の傾向を見てみよう。

アンケートの質問文と選択肢は次のとおりである。「今」に加え「小学生くらいのとき」の使用も質問した。「今」の「その他」の回答には、「おばあちゃん」などが想定される。回答者には、これと同様の選択肢が書かれたカード（回答票）を見せながら回答を求めた。なお、「どれも言わない」は選択肢にはなく、回答者がどれも選ばなかった場合に、調査もれではないことを明示するために調査員がそこにチェックするものである。

(6) 【回答票6】 小学生くらいのときですが、母親に呼びかけるとき何と書いていましたか？ 次の言い方のうち、自分で言ったことがあるものをすべて選んでください。「今」ではなく「小学生くらいのとき」ですので、思い出しながら答えてください。

- | | |
|------------|--------------------------|
| (ア) かーちゃん | (カ) おっかちゃん |
| (イ) おかーちゃん | (キ) ママ |
| (ウ) かーさん | (ク) おふくろ |
| (エ) おかーさん | (ケ) その他 → 具体的に () |
| (オ) おっかさん | どれも言わない |

(7) 【回答票7】 では、今は母親に何と呼びかけていますか？ 次の言い方のうち、自分で言うことがあるものをすべて選んでください。お亡くなりになった方は、夢で呼びかけるときで考えてください。夢の中のあなたの年齢は、今の年齢です。

(選択肢は(6)と同じ)

【今】の結果は図5・図6のとおりであった。なお、本文中での表記は、他の箇所との統一を優先しカタカナ表記とした。

全体としては「オカーサン」が最も多く約半数が使用している。次いで多いのは、使用者率は1割程度にとどまるが「オカーチャン」である。図6によるとこれらには男女差が多少見られ、使用者率はどちらかというとも男性よりも女性の方が高い。「オカーサン」には、明確で一貫した年齢層による違いは認められないが、「オカーチャン」は20・30代では数値が低く、これに代わって「カーサン」の数値が高くなる点が注目される。

これに対し【小学生の頃】の結果は図7・図8のとおりである。大きな傾向は【今】と同様であるが、「オカーチャン」が【今】の倍近くいる点は注目される。つまり「オカーチャン」は、児童の頃は使うがその後は使うのをやめる「子供語」の性質を多少含む表現ということになる。使わなくなるという形で加齢変化が認められる表現の一つである。

図8の年齢層別のグラフは、平均して回答者がおよそ10歳の頃の表現であると考え、60・70代の回答は昭和30年代～40年代の子供たちの表現、40・50代の回答は昭和50年代～60年代の子供たちの表現、20・30代の回答は平成時代の子供たちの表現、と見ることができる。現在に向けて大きく変化しているのは、「オカーチャン」の減少と、それを補完する形での「オカーサン」の伸張である。とりわけ女性（女兒）の間での置き換えが

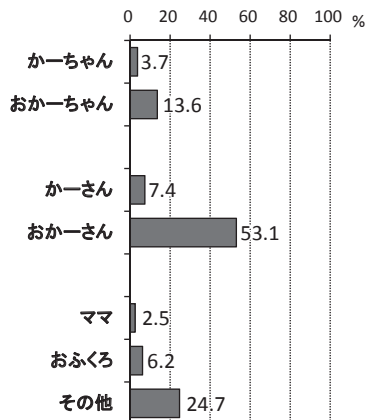


図5 母親への呼びかけ【今】

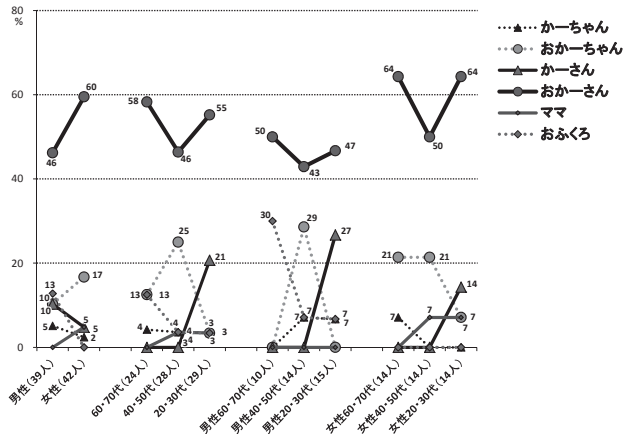


図6 母親への呼びかけ【今】(属性別)

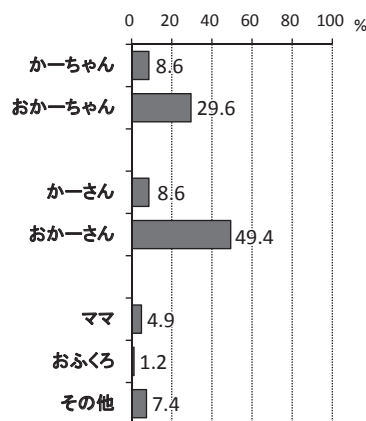


図7 母親への呼びかけ【小学生の頃】

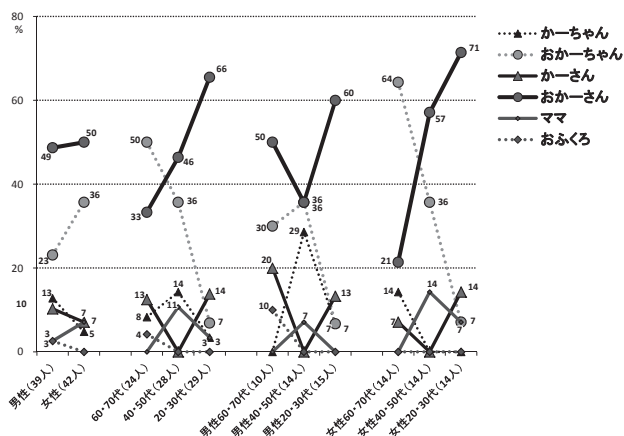


図8 母親への呼びかけ【小学生の頃】(属性別)

著しい。すなわち、昭和30年代～40年代ではむしろ優勢であった「オカーチャン」が徐々に衰退し、これに代わって「オカーサン」が普及し続けた結果、平成にはこれが一般的な表現となっている。「オカーチャン」から「オカーサン」への変化が確認される。

先に見た札幌市での変化は「カーサン」→「オカーサン」であった。“終点”が「オカーサン」である点は共通であるが、それ以前の有力な表現が札幌市では「カーサン」であるのに対し岡山市は「オカーチャン」である点が異なる。「記憶時間」による調査を一部取り入れて滋賀県湖東地域を調査した井上史雄(2017)によると、当該地域では「オトーチャン」から「オトーサン」への変化があったとする。父親と母親の違いはあるが、並行関係にある表現であることを考えると、「オトーチャン」「オカーチャン」のような「チャン」を付けた表現は、一昔前の西日本的な表現である可能性が考えられる。なお、「オトーサン」の普及は全国的な傾向のようである。北海道から近畿地方までの総合グロットグラムを用いて、〈昔〉(子どもの頃)と〈今〉の「オトーサン」の使用を分析した井上史雄(2015)は、〈昔〉は「オトーサン」を用いるのはほぼ全域において若い世代のみであったものが、〈今〉

では調査地域全域で他の世代も用いておりこの表現が普及しているとする。地域により調査時期が異なるため〈昔〉がいつ頃であるかは一定せず、そのため慎重な分析になったものと推測されるが、〈昔〉の時期が異なることは利点にもなる。すなわち、〈昔〉についての年齢層別の分析結果は、じつは〈時代〉による変化をある程度反映したものと見ることができる。たとえば、50代の〈昔〉の回答は昭和初期頃の子どもたちの「オトーサン」の使用状況を示している一方、30代のそれは昭和20～30年代頃の子どもたちの「オトーサン」の使用状況を示しており、「オトーサン」の使用がこの間普及したと見することもできる。

3.2. 「オカン」と「オトン」

母親・父親の呼称のひとつに「オカン」「オトン」がある。もともとは近畿地方を中心とする西日本で使われていた呼称と考えられるが、近年は全国的に使われる傾向が見られる。(2)の全国調査により現在の使用状況を見てみよう。

質問文と選択肢は次のとおりである。「オカン」「オトン」という表現を提示した上で、回答者の使用を択一式に回答させた。なお、「オカン」「オトン」という表現を回答者に提示する際は、調査員が「オカン」「オトン」と口に出すのではなく、選択肢とともに回答票(カード)に書かれた「オトン」「オカン」という文字を回答者に見せることによった。これは、調査員による発音の不自然さや調査員間の不揃いを排除し、回答者のイメージを一定にするためである。

Q 4.(3) [回答票 18] 「母親」という意味で、このように言うことがありますか。

※ 調査員注意 () 内は読まない! → (「おかん」)

(ア) 言うことがある (イ) 言わない

(4) [回答票 19] 「父親」という意味で、このように言うことがありますか。

※ 調査員注意 () 内は読まない! → (「おとん」)

(ア) 言うことがある (イ) 言わない

(1) 「オカン」

「オカン」の結果は図9のとおりであった。数値は「言うことがある」と回答した人の割合である。なお、人口が多くさまざまな点で全国への影響力が強い首都圏(東京都・神奈川県・千葉県・埼玉県)については、同じ調査を同時期に122人追加して行った。全国調査での首都圏の回答者は214人であるので、これを加えると336人となる。全国の状況を見る際は追加したデータは含めないが、首都圏について属性別に分析する際は、より精度の高い分析結果を得るために、この336人のデータを用いることとする(グラフでは点線で示した)。首都圏での調査の回答者数は、「全体(803人/336人)」のように、()内の右側にスラッシュで区切って示した。なお、地域別のグラフでは、参考データという位置づけで「★首都圏(336人)」として示した。

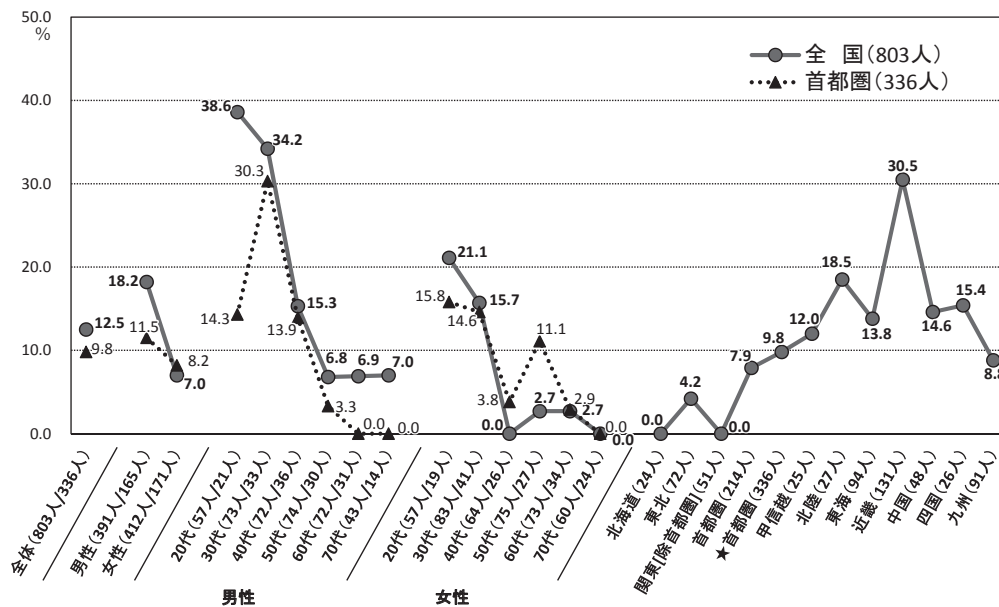


図9 母親への呼びかけ「オカン」

これによると、日本全体としての「オカン」の使用者率は1割程度であることがわかる。現時点ではそれほど一般的な表現ではない。首都圏もほぼ同じ状況である。男女別に見ると女性よりも男性に使用者率が高く、首都圏にも同様の傾向が認められる。「オカン」はやや男性語的な表現であると言える。年齢層による違いが男女とも著しい。全国調査では、50代以上の男性や40代以上の女性では1割に満たない「オカン」が、それよりも下の年齢層で急上昇し、男性は20代で約4割、女性も約2割が使用している。全国的に見ると30代・20代で一定の使用者率を持つ表現であると言える。首都圏にも同様の傾向が認められる。ただしこうした年齢差が、若年層に向けての普及を現わしているのか否かの判断は慎重を要する。たとえば「オカン」は若年成人語であり、40～50代以上になると使わなくなる可能性が、このデータだけでは排除できないからである。

地域差も顕著に認められる。「オカン」は近畿地方をピークとし、そこから離れるにつれて使用者率が低下する「西高東低」の分布となっている。近畿地方から周辺へと伝播した様を示す数値であると考えられる。

(2) 「オトン」

「オトン」の結果は図10のとおりである。

「オカン」と同様、日本全体としての使用者率は1割程度であり、現時点ではそれほど一般的な表現とはなっていない。首都圏もほぼ同じ状況である。使用者率は女性よりも男性に高い点も「オカン」と同様である。「オカン」も「オトン」もやや男性語的な表現であると言える。年齢層による違いが男女とも著しく、「オカン」とほぼ同様の傾向が認められる。地域差も顕著に認められ、近畿地方をピークとする「西高東低」の分布となっている。

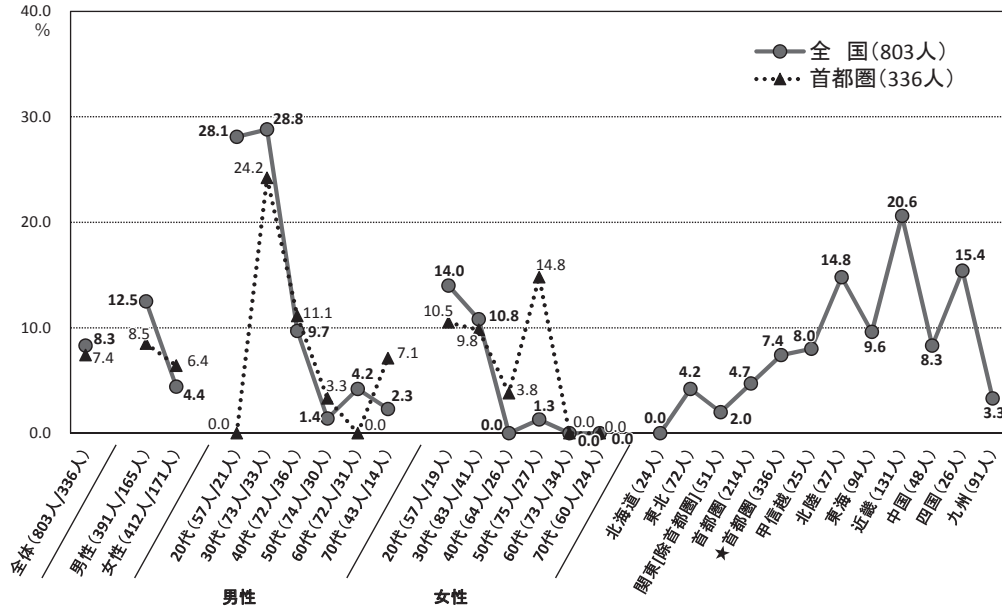


図10 父親への呼びかけ「オトン」

(3) 「オカン」と「オトン」(全国)

「オカン」と「オトン」はおおよそ同じ傾向を示したが、両者を比較して示したのが、図11(全国)と図12(首都圏)である。

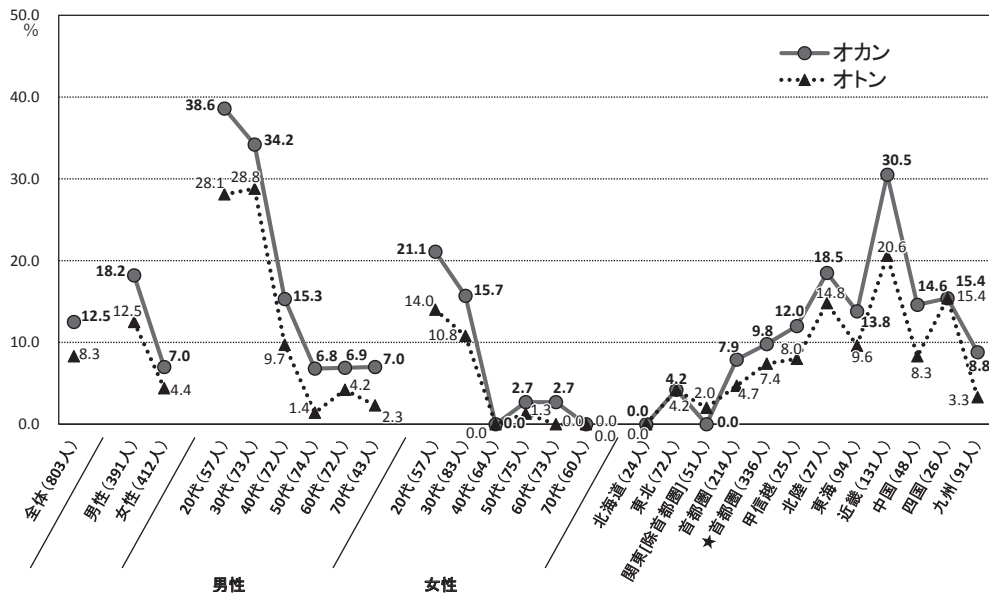


図11 「オカン」と「オトン」の比較(全国)

図 11 によると、「オカン」と「オトン」の数値はおおよそ同じであり、「オカン」と言うことがある人は「オトン」とも言うことがあると言える。しかしながら多少違いも見られ、「オカン」の方が「オトン」よりも全体的に使用者率が多少高い。年齢層別に見ると、「オカン」も「オトン」も使用者率が極めて低い 40 代以上の女性を除き、どの年齢層も「オカン」の方が「オトン」よりも数値が高い。地域別に見ても、使用者率が極めて低い関東以北を除けば、どの地域にもこうした傾向が認められる。現在全国的に優勢であると推測される「オカーサン」と比較すると、「オカン」はよりくだけて親しみの度合いが強い表現と言える。一般的には、父親との関係よりも母親との関係の方が親密であることが、「オカン」の使いやすさを押し上げている可能性が考えられる。

(4) 「オカン」と「オトン」(首都圏)

同じことを首都圏で見たのが図 12 である。首都圏においても「オカン」と「オトン」の数値はおおよそ同じであるものの、やはり「オカン」の方が「オトン」よりも使用者率が多少高い。数値が相対的に高くなる 30 代以下で、両表現の開きが男女ともやや大きくなる。

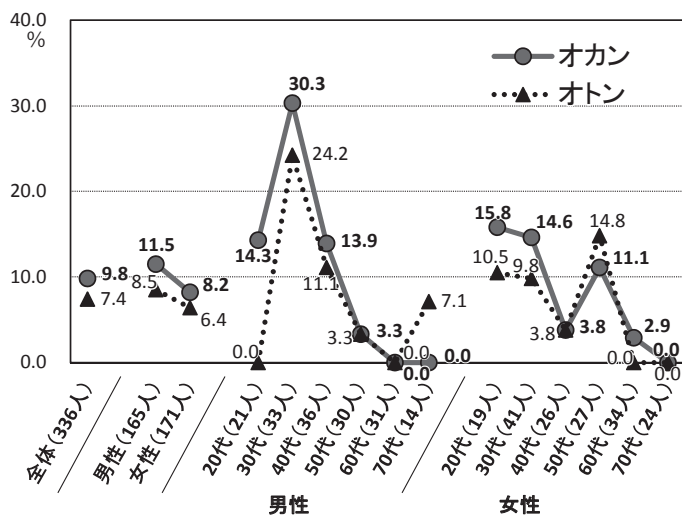


図 12 「オカン」と「オトン」の比較 (首都圏)

「オカン」は若年成人語の可能性のあることを先に述べたが、それを確認した研究がある。関西に住む 47 人の成人男女を対象に、2006 年～2008 年にかけて半構造化インタビューにより共同調査を行なった村中淑子 (2009) によると、「オカン」「オトン」は半数強の回答者が使用していると回答したが、使い始めた時期は中学生の頃からがそのうちの約半数であり、残りは大学生や社会人になってからであったとする。その使用理由として、それまで使っていた「オトサン」「オカーサン」「オトちゃん」「オカーちゃん」が「気恥ずかしい」「照れくさく感じるようになった」「身内敬語を避けなくなった」が聞かれたとする。すなわち、「オカン」「オトン」の使用には、個人内の成長・加齢が伴い、いわば子どもを“卒業”するために使われ始める「成人語」としての性質を持つ呼称のひとつと言える。図 12 では、「オトン」も「オカン」も、20 代から 30 代にかけてはむしろ数値の上

昇が見られた。全体としては首都圏でも普及しつつ（つまり時代変化を伴いつつ）、しかしながら20代から30代にかけては加齢変化も同時に働いている可能性が考えられる。もっとも、全国調査の方にはこのような上昇は見られないが、使用者率が高い近畿等においては10代が加齢変化のピークであるといったような地域による異なりが、全体の数値に影響している可能性が考えられる。数値の高い近畿地方を加齢変化という観点からより詳細に調査することが望まれる。

3.3. 「バーバ」と「ジージ」

本論の冒頭に述べたように、祖父を意味する「ジージ」、祖母を意味する「バーバ」も近年急速に全国的に普及しつつある。新聞の読者投書欄でも、次のようにしばしば現れている。いずれも岡山県の地方紙『山陽新聞』（夕刊）の「ちまたの風」への投書である。なお（ ）内は筆者による補足である。

- ・「(孫の) ゆうすけがじいじ (=投稿者) の顔を見つけて「じいじ、じいじ」と手を振り、熱烈歓迎を受ける。」(2010年8月3日付/72歳男性)
- ・「(夫は) 子煩悩だけに大変なでき愛じいじになるぞと思いやられる。」(2010年12月15日付/58歳女性)
- ・「ひ孫の陽君が、玄関を入るなり「ばあばちゃん、おめでとう」と言って、大きな花束をくれた。」(2010年11月2日付/78歳女性)

「でき愛じいじ」のような臨時複合語や、接尾辞「ちゃん」を付けた「ばあばちゃん」のような用法もあることが確認される。

これらを全国調査および岡山市調査で設問とした。

全国調査での質問文と選択肢は次のとおりである。

Q 4.(5) [回答票 20] 「祖母」という意味で、このように言うことがありますか。

※ 調査員注意 ()内は読まない! → (「ばーば」)

- (ア) 言うことがある (イ) 言わない

(6) [回答票 21] 「祖父」という意味で、このように言うことがありますか。

※ 調査員注意 ()内は読まない! → (「ジージ」)

- (ア) 言うことがある (イ) 言わない

(1) 「バーバ」

「バーバ」の使用者率は図13のとおりであった。

全国の使用率は23.7%であり、およそ4人に1人の成人が現在「バーバ」を使っていることがわかる。^{注3}かなりの速度ですでに一定程度普及が進んでいる。首都圏ではその数値がさらに上昇して31.3%にのぼり、成人のおよそ3人に1人が使っている。

男女別に見ると、全国においても首都圏においても、使用者率は男性よりも女性で高い。特に首都圏の女性は41.5%にも達する。女性を中心に普及しつつある表現であると言える。

年齢層別に見ると、男性も女性も、若年層ほど数値が高い傾向が見られる。ただし使用者率のピークは最も若い20代ではなく、全国では男女とも30代、首都圏では男女とも

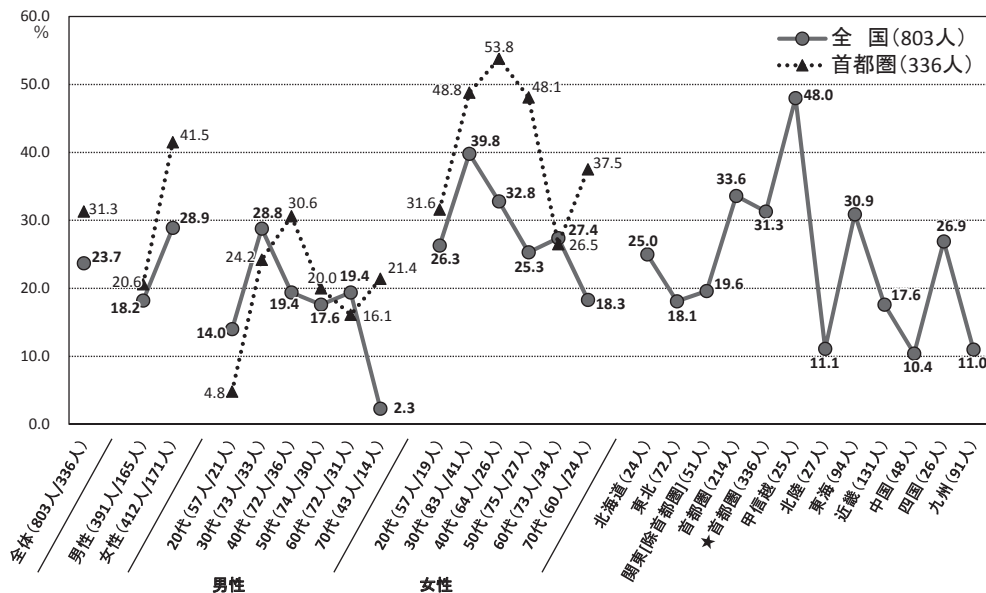


図13 祖母への呼びかけ「バーバ」

40代となっている。特に首都圏の40代女性の数値は5割を超え、その前後の年齢層も5割に近い点は注目される。こうした人々の間ではかなりの程度普及している表現である。

使用者率のピークが20代ではなくその上の30代・40代であるのは、自分に子供が生まれて自分の母親（や父親）を祖母（や祖父）の名称で呼び改めること自体がこの年齢層に多いことや、そうした新しい事態が生じた際は呼称も新しいものに改めやすいといった事情が背景にあるものと考えられる。たとえば、これまでずっと祖母のことを「オバーちゃん」と呼んできた者が、最近「バーバ」が増えてきたからと言って「バーバ」に切り替えるというようなことはしにくいように思われる。自分に子供ができて自分の母親が祖母になったというような新しい事態が生じたタイミングで切り替える方が自然であろう。そうした事情で、使用者率のピークは20代ではなく30代・40代となっているものと考えられる。

地域別に見ると、「バーバ」は首都圏や甲信越、東海で数値が高い。「バーバ」はこうした地域で生まれ、その周辺へと広がった可能性が考えられる。静岡県在住のある大学生から2009年に聞いた話によると、親戚の高年女性を区別するのに「○○バーバ」「△△バーバ」（○○と△△には地名が入る）と呼び分けているとのことである。また、苺を栽培している近所の高年女性のことを「苺バーバ」、猫を飼っている高年女性のことを「猫バーバ」と呼んでいるとのことで、血縁関係にない者にまで「バーバ」を用いている。こうした用法の拡大が全国的な広まりを見せるか否かも今後注目される。

(2) 「ジージ」

「ジージ」の使用者率は図14のとおりである。全国での使用者率は約2割である一方首都圏での使用者率は約3割である点、男性よりも女性で使用者率が高くなる点、使用者率のピークは30代～50代である点、地域別では首都圏や甲信越、東海で数値が高くなる

点など、おおよそ「バーバ」と同様の傾向が認められる。

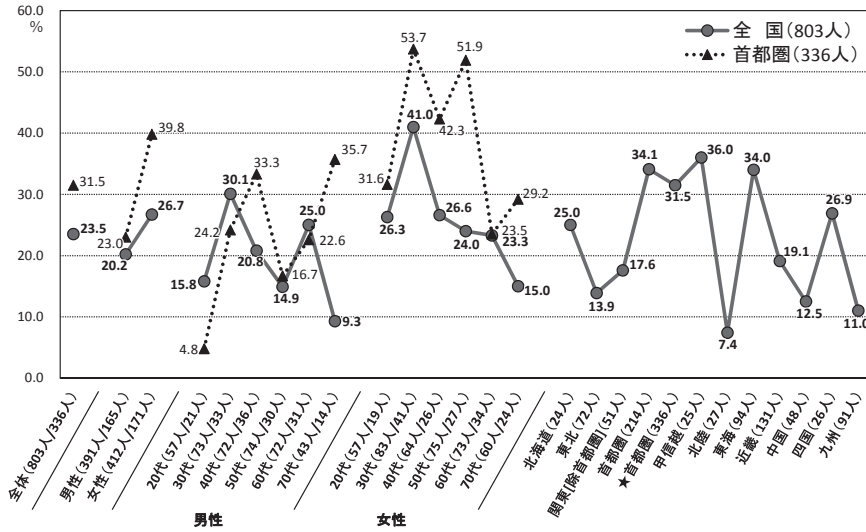


図 14 祖父への呼びかけ「ジージ」

(3) 「バーバ」と「ジージ」の関係

「バーバ」と「ジージ」を比較しやすいよう、先の2つのグラフを組み替えて示したのが図15(全国)と図16(首都圏)である。

図15によると、先に述べたように、両者はおおむね同様の傾向を示すことが改めて確認される。すなわち、「バーバ」と言う人は「ジージ」とも言うし、「バーバ」と言わない人は「ジージ」とも言わない。調査での設問が隣接してしているという影響も一部あるかもしれないが、「バーバ」と「ジージ」はセットとしての使用が基本である。

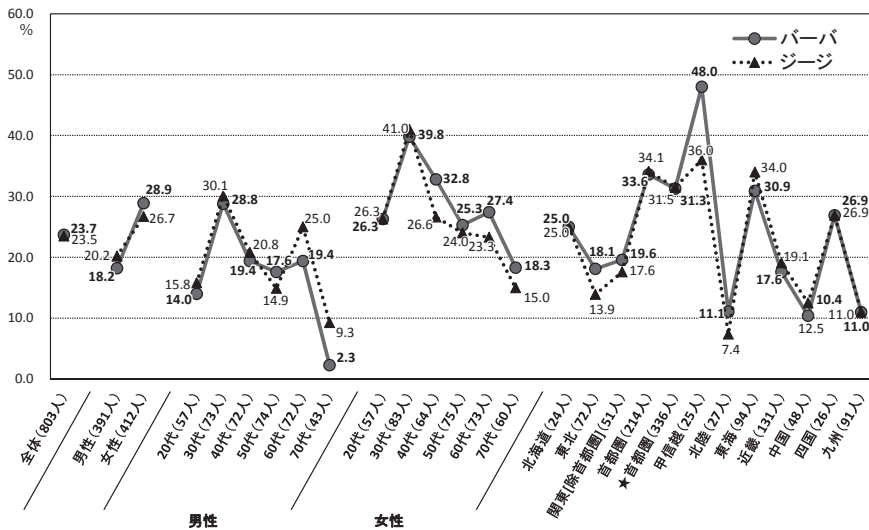


図 15 「バーバ」と「ジージ」の比較(全国)の呼びかけ「ジージ」

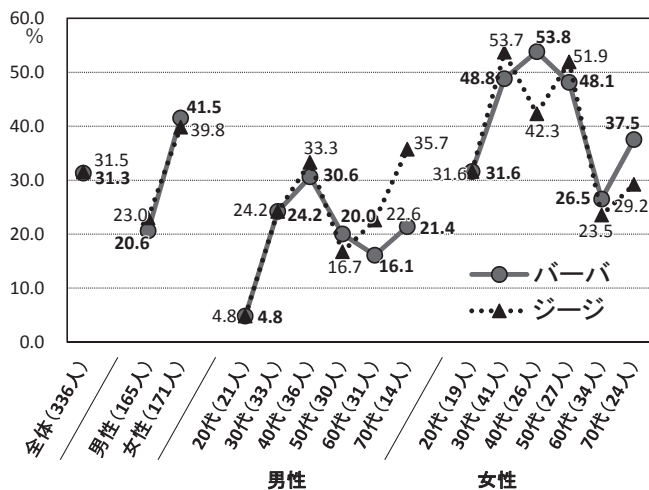


図16 「バーバ」と「ジージ」の比較（首都圏）

図16は首都圏について同様に比較したものであるが、これも両者はおおむね同様の傾向を示すことが改めて確認される。ただし年齢層別に見ると、「バーバ」も「ジージ」も、男性においても女性においても、全国の傾向と一部違いも見られる。男性においては50代ないしは60代を“谷”として70代で再び数値が高まる。女性においても60代を“谷”として70代で再び数値が高まる。これはおそらく、孫ができて祖父母になった回答者自身のことを祖父母の呼称で呼び始める人がこの年齢層に多く、その際新しい呼称である「ジージ」「バーバ」を採用した人が少なからずいたためではないかと考えられる。図15の全国の年齢層別グラフにおいて、男女とも60代でもう一つ小さなピークが見られるのも、同様の理由によるものと考えられそうである。

本調査では20代以上を調査対象としたが、東京都在住者の小学生から社会人までの男女250人を2010年にアンケート調査したセペフリバディ・アザム（2012）によると、会話の途中での呼びかけ表現（＝言及表現）として、小学生・中学生を中心に「ジージ」「バーバ」や「ジジ」「ババ」が見られるとする。幼時の頃から「ジージ」「バーバ」を使っているのがこの世代ということなのであろう。

(4) 「ジージ」の【今】と【小学生の頃】の比較（岡山市）

全国の年齢層別グラフでは、10代を除き全体的には若年層になるに従い「バーバ」「ジージ」の使用者率が高くなる。これを、この表現が普及していることの反映と見ることもできるが、年齢が高くなるにつれてこうした表現を使う人が減少すると解釈することもできる。いずれであるかを確定するためには、経年調査ないしは過去と現在の使用を比較する等による複数時点での調査が必要となる。岡山市での調査では、調査項目は「ジージ」のみであるが、【今】に加えて【小学生の頃】の使用を質問していることから、これらの結果を比較することで、時代による変化がはたして本当にあるのか、それとも使用をやめるという形での加齢変化であるのかを検討する。

質問文と選択肢は次のとおりである。「ジージ」を言ったことがあるか（【今】の場合は

言うことがあるか)、それとも言わなかったか(【今】の場合は言わないか)を択一式で回答させた。結果は図 17 のとおりであった。

(8) [回答票 8] 小学生くらいのときですが、「おじいさん」という意味で、このように自分で言うことはありましたか? 言葉を伸ばす位置に注意してください。

※ 調査員注意 ()内は読まない! → (「じーじ」)

(ア) 言ったことがある (イ) 言わなかった (ウ) わからない

(9) [回答票 9] では、今はこのように自分で言うことはありますか? 自分自身や、自分の配偶者、あるいは自分の父親を呼ぶときで考えてもかまいません。

※ 調査員注意 ()内は読まない! → (「じーじ」)

(ア) 言うことがある (イ) 言わない (ウ) わからない

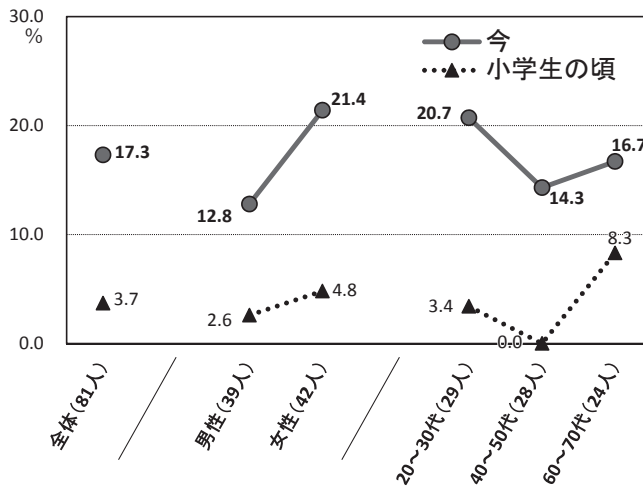


図 17 「ジージ」の使用者率—【今】と【小学生の頃】— (岡山市)

【小学生の頃】とは、60・70代は昭和30年代～40年代、40・50代は昭和50年代～60年代、20・30代は平成時代である。いずれも数値は低く、この頃は岡山市(あるいは岡山県)の子供たちの表現として「ジージ」は基本的に用いられていなかったこと、すなわち「ジージ」という表現が当地にほぼ存在しなかったことが確認できる。60・70代は数値が1割程度あるが、それよりも若い40・50代で数値がゼロであることからすると、「ジジ」等と勘違いして回答した可能性が考えられる。

これが【今】になると、どの年齢層でも数値が上昇し、この間に変化があったことが確認される。言葉の加齢変化とは、年齢が低いうちは使わないけれども、年齢が高くなるにつれてかつての高年齢層が使っていた表現を自ら使い始めるという現象である。「ジージ」は、年齢の上昇に伴い使い始めるようになることから表面的には言葉の加齢変化のように見えるが、しかしかつては「ジージ」という表現が存在しなかったことを考えると、その本質は加齢変化ではなく時代変化と見るのが適当である。岡山市でも「ジージ」が確かに普及

しつつあること、すなわち時代による変化が生じつつあるということが、【今】と【小学生の頃】との比較から確認される。この普及は、特定の年齢層にのみ生じたものではなく、全年齢層に及んでおり、調査時点では岡山市民の2割近くが使っている。なお、岡山市でも男女差が見られ、女性の方が男性よりも使用者率が高い。全国の傾向と一致する。

3.4. 自称詞の「ウチ」「ウチラ」

以上、親族呼称として注目される表現を中心に最近の動向を見てきた。本論の最後の項目として、親族呼称ではなく自称詞であるが、近年使用地域や使用者率を拡大しつつあると考えられる「ウチ」を見てみよう。

『日本国語大辞典 第二版(第二巻)』(2001年、小学館)の「ウチ」の項の説明によると、自称代名詞としての「ウチ」は「関西を中心とする方言。主として婦女子が用いる。」とあるように、もともとは関西およびその周辺の女性が用いる地域限定の表現であった。これが現在では“全国区”化しつつあることから、全国調査の項目の一つとした。質問文と選択肢は次のとおりである。「ウチ」に加えその複数形の「ウチラ」も調査項目とした。

Q 4.(1) [回答票 16] 「わたし」という意味で、このように言うことがありますか。

※ 調査員注意 ()内は読まない! → (「うち」)

(ア) 言うことがある (イ) 言わない

(2) [回答票 17] 「わたしたち」という意味で、このように言うことがありますか。

※ 調査員注意 ()内は読まない! → (「うちら」)

(ア) 言うことがある (イ) 言わない

(1) 「ウチ」(単数形)

単数形の「ウチ」の結果は図 18 のとおりであった。

全国の使用率率は16.9%であり、およそ6人に1人の成人が「ウチ」を使っていることがわかる。これに対し首都圏では11.3%にとどまる。

男女別に見ると、全国では男性よりも女性で使用者率が高い。一方首都圏は男女差が小さい。首都圏では、女性語としてではなく一般的な代名詞として「ウチ」を用いる男性も一定の割合いることが考えられる。

年齢層別に見ると、全国での男性は15%前後でほぼ一定しているように見えるが、女性は40代から30代・20代にかけて増加が見られる。とりわけ30代から20代にかけての増加が著しく、20代の女性は4割近くが使っている。同様の傾向は、60代以上の女性の間では使用者率がゼロに近い首都圏にも認められ、20代の女性は2割が使っている。国立国語研究所(2002)によると、1990年頃の東京の女子中学生の使用率は1割程度であったことからすると、それ以降徐々に増加傾向にあったものと考えられる。もともとは関西の女性の間で使われていた「ウチ」は、現在では若年層女性にとって、全国的にもまた首都圏においても有力な自称代名詞の一つとなっている。なお、20代から40代の間の数値の異なりは、全国的な普及を反映している面もあるが、「ウチ」は若者語でもあり、中年世代に近づくに従い使用をやめる人も少なからずいることも推測され、そうした形で

の加齢変化を反映している面もあるのではないかと考えられる。この点については、岡山市での調査の分析で検討する。

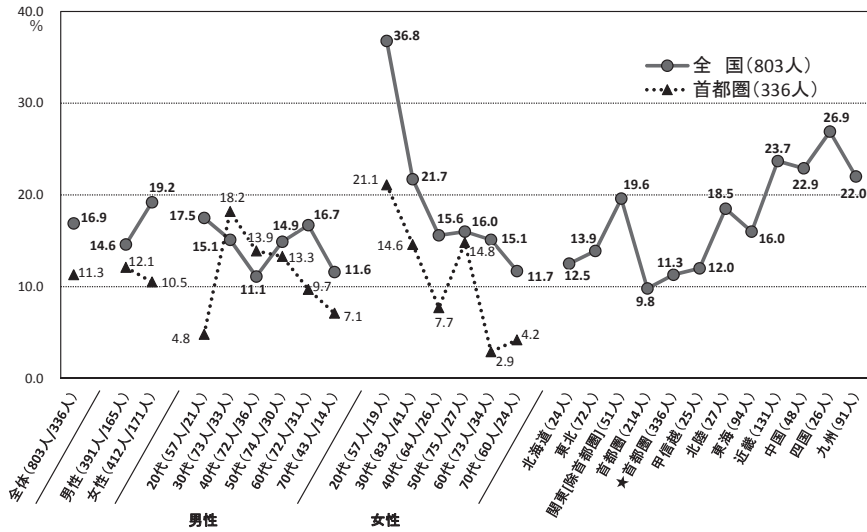


図 18 自称詞 (単数) の「ウチ」

若年層の女性の間で「ウチ」が好まれるようになったのは、共通語で女性が使える代表的な自称代名詞は「ワタシ」と「アタシ」くらいしかなく、男性の「オレ」に相当するようなくだけた表現は存在せず空き間であったところに、「オレ」に相当する女性の「ウチ」が関西に存在していたことから、その空き間を埋めるのに適当な表現だと若い女性たちの間で意識され、その結果全国的に取り入れられるようになってきた可能性が考えられる。

地域別のグラフを見ると、「ウチ」は近畿以西で2割を超え、他よりも高いことが確認される。しかしながら東日本の首都圏や、遠く離れた北海道でも1割程度の使用者率が見られるのが現在の状況である。「ウチ」が東京でも用いられていることについては、最近ではセペフリパディ・アザム (2013) の報告がある。東京都在住の小学生から社会人までの男女250人を対象に2010年にアンケート調査したところ、女子は高校生以下を中心に、両親に対し「ウチ」を使用する者が一定の割合 (集計表によると2割程度) いる。本調査の首都圏の20代女性に近い数値である。

なお、グラフを見ると西日本の数値は一見かなり高いように見えるが、これは最大値を100%ではなく40%として示しているためである。「ウチ」の発生元とされる近畿においても、使用を女性に限定しても、全員に近いほどの割合の人が使っているわけではない。関西の女子大学生97名を対象にアンケート調査した坂本有紗 (2014) によると、本文での言及はないが、示された集計表によると、家庭内で「ウチ」を使用する女性は1~2割にとどまっている。

(2) 「ウチラ」 (複数形)

複数形の「ウチラ」の結果は図 19 のとおりである。

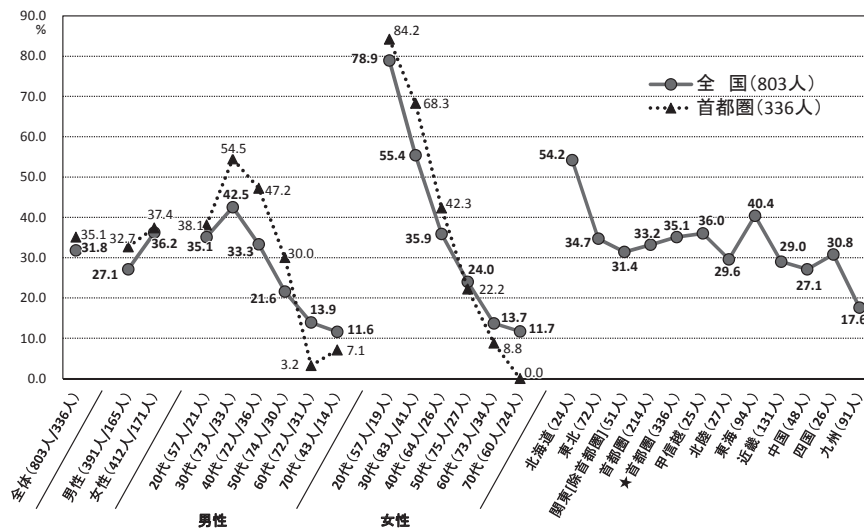


図 19 自称詞（複数）の「ウチラ」

全国の使用率は31.8%であり、およそ3人に1人の成人が「ウチラ」を使っている。「ウチ」と比較すると使用率は倍増する。首都圏での数値はさらに若干高くなり、「ウチ」と比較すると約3倍になる。複数形の使いやすさは首都圏でより顕著である。

男女別に見ると、男性よりも女性で使用者率が高い。ただしその差は1割以内にとどまり、顕著な差というほどではない。

年齢層別に見ると、男性の20代を除き、男女とも若年層になるに従い数値は一貫して上昇する。とりわけ女性の伸び率と数値の高さは著しく、20代では全国においても首都圏においても8割前後の女性が使用する。若年層の女性の間では、今では「ワタシタチ」「アタシタチ」に匹敵する代表的な自称代名詞となっている。男性においても20代では使用者率がある程度高く、全国で約4割、首都圏では5割を超える。「ボクタチ」ではおとなし過ぎるが「オレタチ」では乱暴過ぎると感じる男性にとっては、「ウチラ」はちょうどその中間に位置づけられる適当な表現と意識され普及が進んだ可能性が考えられる。女性よりも男性の方が数値が低いのは、関西の単数形「ウチ」が女性を中心とした表現であることから「ウチラ」も女性的な表現であったため男性にはやや使いにくいと意識されたであろうことと、男性には「ウチラ」にある程度相当する「オレタチ」「オレラ」があるため「ウチラ」を使う必要を感じない人が女性よりも多かったという事情が可能性として考えられる。

なお、若年層に向けての数値の増加傾向の中には、「ウチ」の場合と同様、「ウチラ」の普及が反映されている面もあるだろうが、中年世代になるに従い使うのをやめるといった形での加齢変化も同時に反映されている可能性がある。

地域別に見ると、複数形の「ウチラ」には、「ウチ」に見られたような西高東低の地域差は認められない。むしろ北海道で最も高く、九州で最も低くなるほどである。「ウチラ」は「ウチ」の複数形であることを考えると、おそらくもともとは関西あるいはさらに広く西日本を中心に使われていた表現だと思われるが、今では方言形と言えなく、男性の「オレタチ」

や「オレラ」に相当する、おもに女性が使う共通語のくだけた自称代名詞となっている。

(3) 「ウチ」と「ウチラ」の関係 (全国)

「ウチ」と「ウチラ」を比較しやすいよう、先の2つのグラフを組み替えて示したのが図20 (全国) と図21 (首都圏) である。

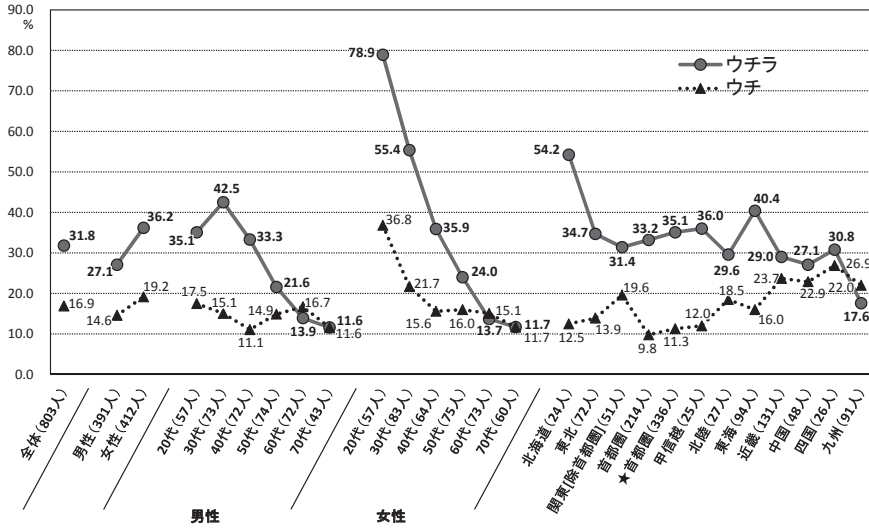


図20 自称詞の「ウチ」と「ウチラ」の比較 (全国)

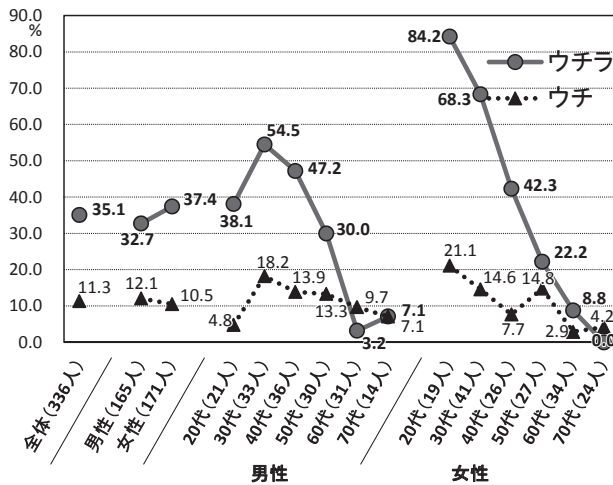


図21 自称詞の「ウチ」と「ウチラ」の比較 (首都圏)

図20によると、全体的に「ウチ」よりも「ウチラ」の方が使用者率が高いことが改めて確認される。ただし60代以上では、男女とも数値が低い中で両表現に差はない。これが50代以下になると、若年層になるに従い「ウチ」と「ウチラ」の開きが拡大し、「ウチ」よりも「ウチラ」の方がはるかに使用者率が高くなる。同様の傾向は図21の首都圏にも

認められる。つまり、全国的にも首都圏においても、「ウチ」は使わないけれども「ウチラ」なら使うという人が、女性を中心に若年層になるに従い増加してきているということである。

両表現の数値の拡大は、図 20 の地域別グラフに見られる。「ウチ」の使用者率が高い近畿以西では、これを複数形にした「ウチラ」も数値はほぼ同じである。これに対し東日本では両者の開きが大きい。とりわけ北海道では数値の開きが4割に達する。これについては、複数形の「ウチラ」は東日本に何の問題もなくいわば順調に受け入れられたが、単数形の「ウチ」は「ウチラ」ほどには受け入れられなかったと見るべきであるのかもしれない。そうした違いの結果として、現在でもある程度方言的である「ウチ」と、ほぼ共通語扱いとなった「ウチラ」という違いも生じている。単数形と複数形とでこうした違いが生じたのは、自称代名詞として「ウチ」を用いない東日本において「ウチ」は「我が家」の意味で用いているため自称代名詞としては使いにくかったこと、これに対し複数形の「ウチラ」には「我が家」という意味がないため自称代名詞として用いやすかった等の理由が考えられる。

(4) 「ウチ」の【今】と【小学生の頃】の比較（岡山市）

「ウチ」や「ウチラ」には若者語的な要素もあり、中高年になるに従い使用をやめる人もいる可能性を先に指摘した。そこで、「ウチ」についてのみであるが、岡山市で実施した調査からその点を検証する。先に見た「ジージ」と同様、【今】に加えて【小学生の頃】の使用も質問したので、これらの結果を比較することで検証する。

質問文と選択肢は次のとおりである。結果は図 22 のとおりであった。

(8) [回答票 8] 小学生くらいのときですが、「わたし」という意味で、このように自分で言うことはありましたか？ 「我が家(や)」という意味ではなく「わたし」という意味です。

※ 調査員注意 ()内は読まない！→(「うち」)

(ア) 言ったことがある (イ) 言わなかった (ウ) わからない

(9) [回答票 9] では今は、「わたし」という意味でこのように自分で言うことはありますか？

※ 調査員注意 ()内は読まない！→(「うち」)

(ア) 言うことがある (イ) 言わない (ウ) わからない

まず【小学生の頃】の全体の使用者率を見ると約3割であることが確認される。これを男女別に見ると、男性の使用者率はゼロに近く、使用者はほぼ全員女性であることがわかる。すなわち「ウチ」は女兒が用いる自称代名詞であり、女兒のうちの半数が使っていた表現であると言える。年齢層別のグラフの60・70代は昭和30年代～40年代、40・50代は昭和50年代～60年代、20・30代は平成時代の小学生ということになる。いずれの時代でも一定程度使われていた表現であることが確認できる。男児で使っていた者はほとんどいないので、女兒に限定すれば使用者率はこの2倍ほど(4割～7割)になろう。

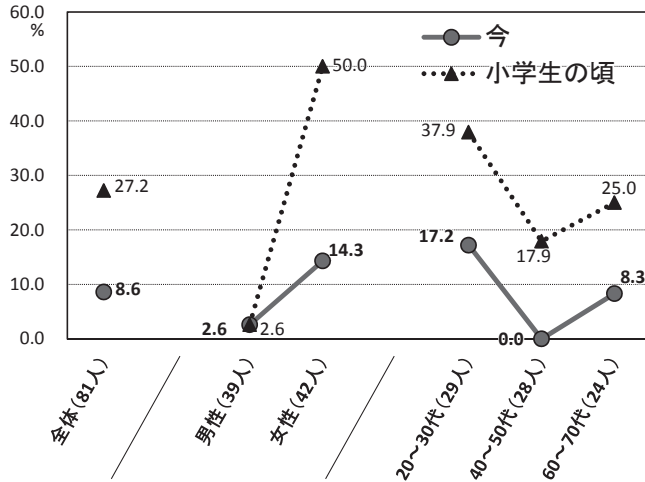


図 22 「ウチ」の使用者率—【今】と【小学生の頃】— (岡山市)

これが【今】になると、使用者率は全体で1割程度にまで低下する。男性の使用は【今】もほぼゼロであり、子供の頃も成人してからも使うことのない表現である。女性の【今】の数値は大きく低下し、【小学生の頃】の3割程度にまで減じる。つまり、子供の頃は「ウチ」を使っていたけれども成人してからは使わなくなったという女性がかかなりいるということである。年齢層別のグラフを見ると、どの年齢層でも数値の低下が生じていることから、使用をやめるという形での加齢変化は、昭和30年代から平成時代までいつの時代にもあったことがわかる。すなわち「ウチ」は、岡山市においては女性（女兒）の若者語であり続けていると言える。そうすると、先に見た全国および首都圏での年齢層別の傾向にも、使用をやめるという形での加齢変化も含まれている可能性はおおいに考えられる。

4. まとめと今後の課題

以上、調査時期はさまざまであったが、筆者が実施した札幌市・全国（首都圏）・岡山市での多人数調査から、親族呼称を中心とする呼称の時代変化と加齢変化を見てきた。

得られたおもな知見をまとめると次のとおりである。

- (1) 札幌市で1985年に実施した多人数調査によると、母親に対する調査時点での呼びかけの大きな傾向は、30代以上の「カーサン」と20代以下の「オカーサン」である。男性の場合は30代以上でさらに「オフクロ」が加わる。【小学生の頃】の回答により時代による変化を見ると、男児の大きな変化傾向は「カーサン」→「オカーサン」であり、その転換点は昭和30年代から昭和40年代にかけてである。これが現在の年齢層による違いとして反映されている。「カーサン」以前の有力な表現は「カーチャン」であったと考えられる。女兒の場合も、男児に少ない「ママ」が一時期増加するもののその後は大きな勢力とならず、大勢は男児と同様の時代変化があったと考えられる。男性の中には、成長の過程で「オカーサン」を使うのをやめて「カーサン」を使い始めた者が一定の割合いたと考えられ、成長に伴う加齢変化も認められる。「オフクロ」

にも同様の傾向が認められ、男性が成人になる過程で使い始める「成人語」であると言える。

- (2) 岡山市で2013年に実施した多人数調査によると、母親に対する現在の呼称（呼びかけ）は「オカーサン」が最も多く約半数が使用している。【小学生の頃】の呼称を年齢層別に分析したところ、「オカーチャン」から「オカーサン」への時代変化が確認された。その結果が現在の状況となっている。なお、【小学生の頃】と【今】とを比較すると、「オカーチャン」は児童の頃は使うがその後は使うのをやめる「子供語」の性質も多少含む表現である。使わなくなるという形で個人に加齢変化が認められる表現の一つである。
- (3) 呼びかけ形式としての「オカン」「オトン」の使用者率は、日本全体でも首都圏でも約1割である。女子よりも男性で使用者率が高い。年齢層別に見ると、30代・20代の使用者率がそれより上の年齢層よりも高い。地域的には近畿地方を使用者率のピークとし、そこから離れるにつれて使用者率が低下する「西高東低」の分布となっている。首都圏においては、全体としては「オカン」「オトン」が普及しつつも（つまり時代変化がある）、20代から30代にかけては加齢変化も同時に働いている可能性が考えられる。
- (4) 祖母を意味する「バーバ」は、全国では成人のおよそ4人に1人が、首都圏では成人のおよそ3人に1人が使っている。男性よりも女性で使用者率が高い。年齢層別に見ると、若年層になるほど数値が高くなる傾向が見られる。ただし使用者率のピークは20代ではなく30代・40代である。これは、自分に子供が生まれて自分の母親を祖母の名称で呼び改めることがこの年齢層に多いことや、そうした新しい事態が生じた際は呼称も新しいものに改めやすいという事情が背景にあるものと考えられる。地域別に見ると、首都圏や甲信越、東海で数値が高い。こうした地域で生まれ、その周辺へと広がった可能性が考えられる。祖父を意味する「ジージ」にも、「バーバ」とおおむね同じ傾向が認められる。岡山市での調査によると、【今】ではどの年齢層でも「ジージ」を使う人が一定の割合はいるが、【小学生の頃】に使っていたと回答した人がほとんどないことから、「ジージ」は確かにこの間に普及した表現であることが確認される。
- (5) 関西起源の自称代名詞「ウチ」の使用者率は、全国の成人でおよそ6人に1人である。使用者率は男性よりも女性の方が高い。女性の使用者率は40代から30代・20代にかけて増加する。とりわけ30代から20代にかけての増加が著しく、20代の女性は4割近くが使っている。現在では若年層女性にとっての有力な自称代名詞の一つとなっている。「ウチ」が全国的に普及しつつある背景には、男性の「オレ」に相当するようなくだけた表現が女性の自称代名詞にこれまで存在しなかったことが要因となっている可能性が考えられる。
- (6) 「ウチ」の複数形の「ウチラ」の使用者率は「ウチ」を大きく上回り、全国の成人でおよそ3人に1人が使っている。男女とも若年層になるに従い数値は一貫して上昇する。特に20代の女性は、全国においても首都圏においても8割前後が使用しており、今では「ワタシタチ」「アタシタチ」に匹敵する若年層女性の代表的な自称代名詞となっている。地域別に見ると、「ウチ」に見られたような西高東低の地域差は「ウチラ」には

認められず、関西あるいは西日本の方言形とは言い難い状況である。東日本において「ウチラ」が受け入れられやすかったのは、単数形の「ウチ」は「我が家」という意味をすでに持っているため自称代名詞として使いにくい一方、複数形の「ウチラ」にはそうした意味がないため自称代名詞として使いやすかった等の事情が考えられる。岡山市での調査によると、いつの時代でも、子供の頃は「ウチ」を使っていたが大人になってからは使わなくなったという女性がかなりいる。すなわち岡山市において「ウチ」は、女性の若者語であり続けていると言える。「ウチ」はそうした性質を持つ言葉として全国の若年層女性に拡大しつつあるものと考えられる。

以上のことが本研究により明らかになった。

親族呼称は比較的短期間に変化（置き換え）が生じることのある表現である。そうであれば、調査から数年あるいは数十年経過した本研究がとらえた状況も、いずれは古くなる運命にある。調査を定期的に繰り返し、データをアップデートすることが望まれる。

井上史雄（2015）が「記憶想起技法」と名づけ、本研究でもおこなった「過去の特定の年齢（年齢層）での使用」に関する質問を幅広い年齢層に実施し、その結果を年齢層別に接続すれば、時代による変化をこまかくとらえることができる。ただし、誰でも確実に思い出せる言語事象でなければ有効ではないので、たとえば昆虫の名称であるとか遊びの名称などのようなものに調査項目は限定されよう。

一方、「過去の特定の年齢（年齢層）での使用」と「現在の使用」とを比較すれば、成長に伴う個人の中での言葉の変化、加齢変化をとらえることもできる。原理的には、もしその中間の年齢における使用を確実に思い出せるならば、こうした変化をよりこまかくとらえることができる。なお、このような調査では、特定の表現を「使うようになる」という形での変化が焦点化されやすいが、特定の表現を「使わなくなる」というのもこの種の変化の一つである。今後はそうした面にも注目しつつ、個人レベルでの言葉の変化、加齢変化をとらえる研究を活発化することが望まれる。

注

- 1 独立行政法人国立国語研究所研究開発部門言語生活グループの研究プロジェクト「国民の言語行動・言語意識・言語能力に関する調査研究（日本語の地理的多様性に関する多角的調査研究）」（2006年度～2009年度前期）の一環として、研究課題「国民の言語使用と言語意識に関する全国調査」により実施されたものである。
- 2 2013年度学内研究助成金（研究課題「岡山市における方言使用・方言意識の現状と動態に関する調査研究」）により行なった。
- 3 このことについては2009年7月1日付の『朝日新聞』において「「じいじ」「ばあば」優しい語感人気／大人の25%使ってます」として紹介されている。

参考文献

井上史雄（2015）「「お父さん」の記憶時間—グロットグラムによる地域差と年齢差—」『社会言語科学』18-1

- (2017) 「『お父さん』の記憶時間」井上史雄編『敬語は変わる—大規模調査からわかる百年の動き』(大修館書店)
- 大久保晴雄 (1982) 「両親の呼称に関する一報告—女子高校生へのアンケートを素材として—」『解釈』28-2
- 尾崎喜光 (1989) 「〈私〉〈母〉を表わす語の性差・場面差およびその移り変わり—札幌市における社会言語学的調査から—」『日本方言研究会第49回研究発表会 発表原稿集』
- 編 (2009) 『加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究』(科学研究費補助金研究成果報告書；非売品)
- (2014) 「岡山における連母音の融合状況 (2) —「岡山市民調査」から見ると—」『清心語文』16
- 国立国語研究所編 (2002) 『学校の中の敬語 1—アンケート調査編—』(三省堂)
- 坂本有紗 (2014) 「家族内の呼称変化—フィクション世界と現実世界—」『武庫川女子大学言語文化研究所年報』24
- セベフリバディ・アザム (2012) 「現代日本語における家族に呼びかける際の呼称表現—世代差と性差を中心に—」『一橋日本語教育研究』1
- (2013) 「日本語における自称表現」『日本語／日本語教育研究』4
- 箕田兵衛 (1974) 「〈読者と編集部〉中学二年生の家族内呼称」『言語生活』275
- 村中淑子 (2009) 「第2章 関西方言および女性語」尾崎喜光編『加齢による社会活動の変化にともなう言語使用の変化に関する研究』(科学研究費補助金研究成果報告書；非売品)